

ぼうさい みくまじろ



No.3

H28. 7. 20 発行

みくまの支援学校
育友会 防災研修部

第2回 防災研修部会「育友会防災ライブラリー」の設置

7月12日（火）午後、「第2回防災研修部会」を開催しました。この日は、5月に行われた「防災参観日」のアンケート結果について検討を行いました。保護者の皆さんの多様な意見について共有したあと、地震・津波の避難訓練に対する学校側の説明を受けました。（詳細は裏面。）



また、保護者が、家庭での防災対策に関する知識を得られるような工夫として、学校の玄関ホールの一隅に「防災ライブラリー」を設置することについても検討を行いました。実際の運用は、2学期以降になる予定です。



会議が終わったあと、玄関ホールで書籍などを閲覧しました。

家庭における防災

地震対策として、家族とは、避難経路、避難方法などについて話し合いをしています。

ですが、自宅が浸水域で自宅に備蓄品を置いても危険なので、高台にあるミカン畑の倉庫に備蓄品を置くようにしています。

高台にあるミカン畑の倉庫を最終集合場所にして、家族と話をしています。

石本三貴（H27 年度 防災研修部長）

家庭における防災の取組について紹介します。
参考にしてください。



「防災参観日」保護者アンケートから



①「避難訓練」 ②「各講座」 ③「災害食体験」 ④「感想」等 の4つの観点で主な意見・感想に対して学校側から説明をいただきました。

「避難訓練」



○時間がかかりすぎているのではないか

逃げるスピードを競うことよりもまずは安全に避難することを最優先しています。子どもたちが慌てて怪我をしないようにセーフティゾーンへの避難、グループ化、余剰人員による避難経路確認等、安全に避難できるように取り組んでいます。

「各講座」



○起震車体験や家具の固定講座は、参考になったという意見が多かったです。

「感想」等



○学校にいる間は、大丈夫なんだろうなと安心しました。家でいる時、もっとよく準備しないといけないなあと思います。

○みくまの学習は、比較的経度である程度コミュニケーションのとれる児童生徒及びその家族向けの学習でしかないように思います。

「災害食体験」



○非常時に温かいものを食べることができるのは、安心感も得られます。
○少し塩分が高かったように感じました。

実際に試食していただいたことで、児童生徒が食べることができるか判断していただけたと思います。また、多様な非常食（おかゆ・お菓子など）についても展示をさせていただきました。

今後一人一人の特性に合わせた避難等の対策を保護者の皆様と一緒に考えていきたいです。

ご協力よろしくお願いします。



みくまの方丈記 ① ～教職員と保護者の連携始まる～



榎本校長先生が特別寄稿してくれました。防災に対する意気込みが感じられます。

連載予定

「ゆく川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」の書き出しで始まる方丈記には、京の都で起ったその時代の様々な出来事が記録されている。長明は郊外に小さな庵を構え、独自の無常観を加味し世情を後世に伝えた。特に、京の大火は長明 23 歳のとき、竜巻は 26 歳、飢饉は 27 歳、地震は 29 歳の時に発生し、その状況が生々しく書かれている。当時の災害等について知る貴重な資料ともなっている。今回、「みくまの方丈記」は防災に関する由無し事をロマンを持ってお伝えしていきたい。

和歌山県は 2014 年 10 月 28 日、南海トラフ巨大地震が発生したときの被害想定を発表した。死者は最悪の場合、県内だけで 9 万 400 人。東日本大震災の死者・行方不明者は 18,455 人（2016.3.10 現在）だから、その約 4.9 倍になる。主な理由は強い揺れ（震度 6 強～7）と津波到達までの時間の短さ（3～4 分）にある。私たちは、みくまの支援学校児童生徒の命をどれだけ守りきれるのか。2015 年 4 月 1 日から教職員と保護者の連携した取組が始まった。